



# 道路土工指針における活荷重の取扱いの変更に伴う標準設計の取扱いについて（通知）

技術基準の種類：設計・施工  
通知日：平成6年8月5日

受管第293号  
平成6年8月5日

部内各課長殿  
各土木事務所長殿  
鳥取港湾事務所長殿

土木部長

## 道路土工指針における活荷重の取扱いの変更に伴う標準設計の取扱いについて（通知）

このことについて、道路構造令及び車両制限令の一部改正に伴い、「道路土工 - 擁壁・カルバート・仮設構造物工指針」における活荷重の取扱いが変更されたことが、建設大臣官房技術調査室長から通知がありました。  
ついては、標準設計の取扱いを下記のとおりとし、平成6年8月15日起工決裁する工事から適用することとしたので貴課・所職員にお知らせください。

### 記

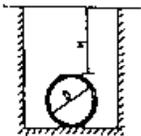
- 「建設省土木構造物標準設計」のうち以下に示すものは当面使用しないものとする。
  - 第1巻パイプカルバートの適用範囲  
土被り4m未満のボックスカルバートの活荷重の取扱い
  - 第5巻土被り4m未満の横断地下道の活荷重の取扱い
- 上記を使用しないことにより、今後の当面の適用は下記（1）、（2）による。
  - パイプカルバートの適用範囲は、別紙 - 1による。
  - 土被り4m未満のボックスカルバート、地下横断歩道の活荷重の取扱いは、別紙 - 2によるものとする。
- 自動設計プログラムの利用について  
自動設計プログラムについては、今回の活荷重の取扱いの変更に伴う修正が完了しているため、必要に応じてこれを用いること。

別紙 - 1

パイプカルバート基礎形式選定図（溝型の場合）

適用条件

- 溝型（Ditch type）



- コンクリート基礎
- 普通地盤
- それぞれの上限值，下限値に入らないものは360°固定基礎とする。

使用方法

- 設計条件としては次に示すものとする。
  - 埋設形式（Ditch型）
  - 土質
  - 活荷重の有無
  - 管種：遠心力鉄筋コンクリート管  
(JISA5303-1985)...1種・2種  
コア式プレストレストコンクリート管  
(JISA5333-1983)...1種・2種・3種
  - 管径：D(mm)
  - 土かぶり：H(m)
- 管径と土かぶりの交点を見出せばよい。  
例) 砂質土、活荷重を考慮、管径1000mm、土かぶり3mの場合、図 - 6.12 (印)により次のように検索できる。  
RC - 1種に対して180°固定基礎  
RC - 2種に対して90°固定基礎

P C - 3種に対して90°固定基礎  
 したがって、経済性を検討の上基  
 礎形式を決定すればよい。

注意事項

1. 標準設計における360°固定基礎は管径D = 1000 mm以下について集録してある。  
 したがって、現地の条件によって管径D = 1000 mmを越え360°固定基礎としなければならない場合は、コンクリート巻厚及び配筋については別途検討するものとする。
2. 土かぶりの少ない施工時においては、活荷重の衝撃が予想以上に大きくなる場合も考えられるので、管内に支保工等を設けるのがよい。

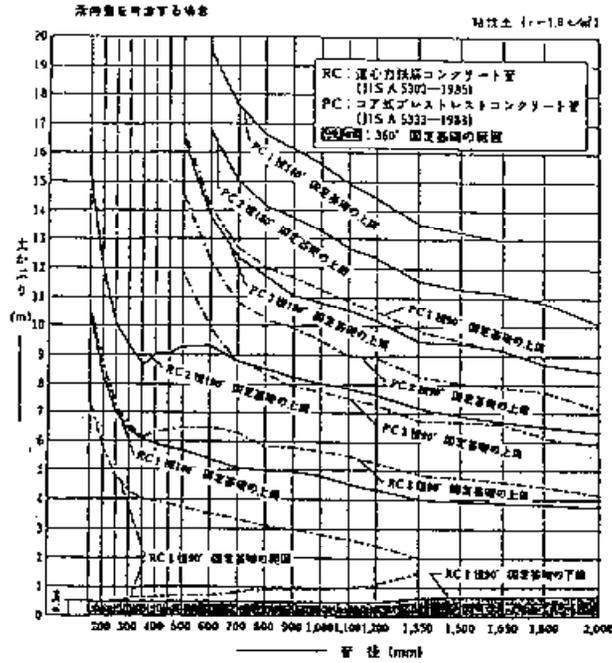


図 - a

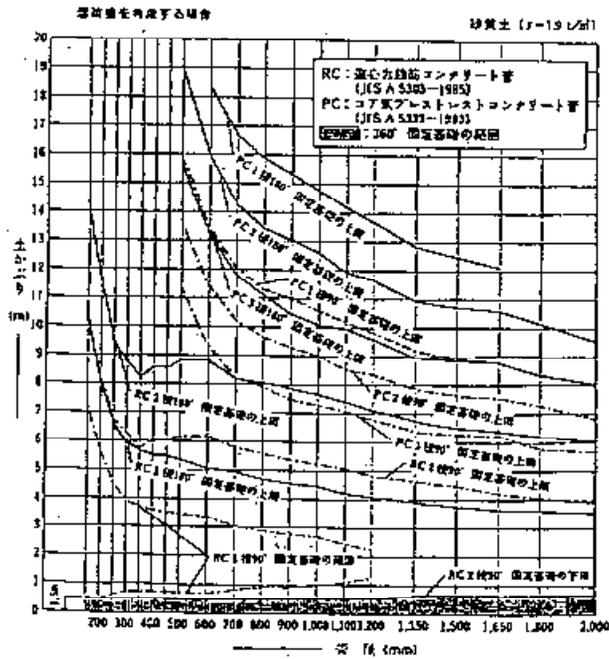


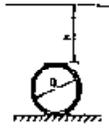
図 - b



## パイプカルバート基礎形式選定図（突出型の場合）

### 適用条件

1. 突出型（Project type）



2. コンクリート基礎
3. 普通地盤
4. それぞれの上限値、下限値に入らないものは360°固定基礎とする。

### 使用方法

1. 設計条件としては次に示すものとする。
  - (1) 埋設形式（Project型）
  - (2) 土質
  - (3) 活荷重の有無
  - (4) 管種：遠心力鉄筋コンクリート管（JISA5303-1985）...1種・2種  
コア式プレストレストコンクリート管（JISA5333-1983）...1種・2種・3種
  - (5) 管径：D（mm）
  - (6) 土かぶり：H（m）
2. 管径と土かぶりの交点を見出せばよい。  
例）砂質土、活荷重を考慮、管径1000mm、土かぶり3.5mの場合、図-6.16（印）により次のように検索できる。  
RC-2種に対して180°固定基礎  
PC-3種に対して90°固定基礎  
したがって、経済性を検討の上基礎形式を決定すればよい。

### 注意事項

1. 標準設計における360°固定基礎は管径D=1000mm以下について集録してある。  
したがって、現地の条件によって管径D=1000mmを越え360°固定基礎としなければならない場合は、コンクリート巻厚及び配筋について別途検討するものとする。
2. 土かぶりの少ない施工時においては、活荷重の衝撃が予想以上に大きくなる場合も考えられるので、管内に支保工等を設けるのがよい。

活荷重を考慮する場合

粘性土 ( $r=1.8\gamma_d$ )

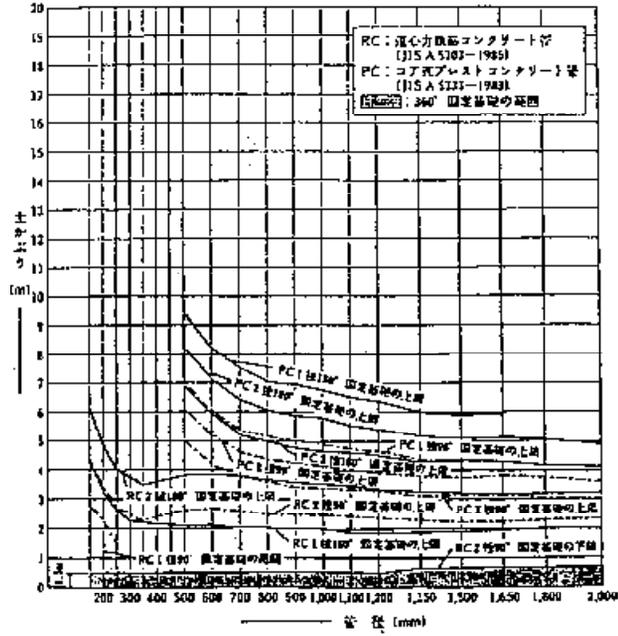


図 - e

活荷重を考慮する場合

砂質土 ( $r=0.9\gamma_d$ )

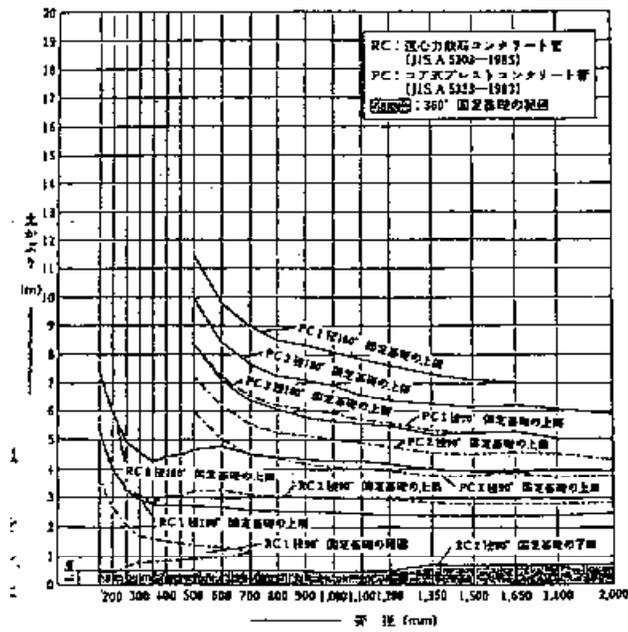


図 - f

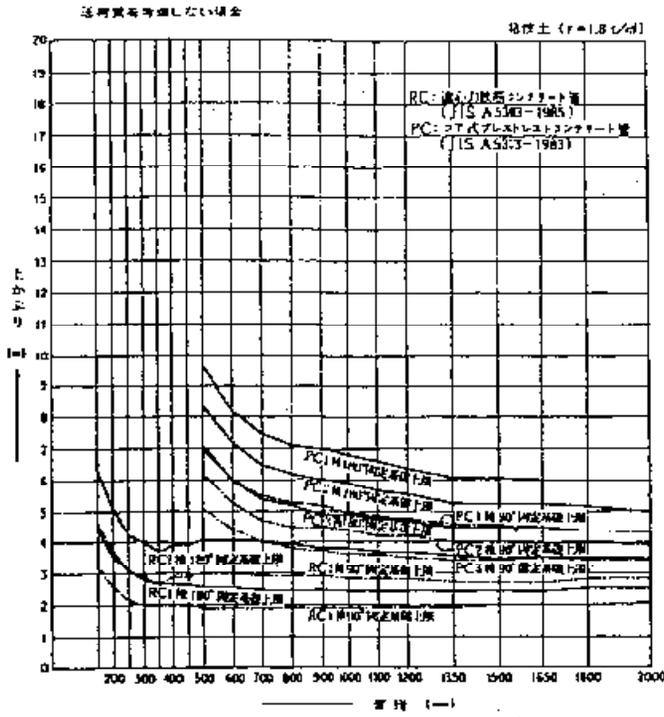


図 - a

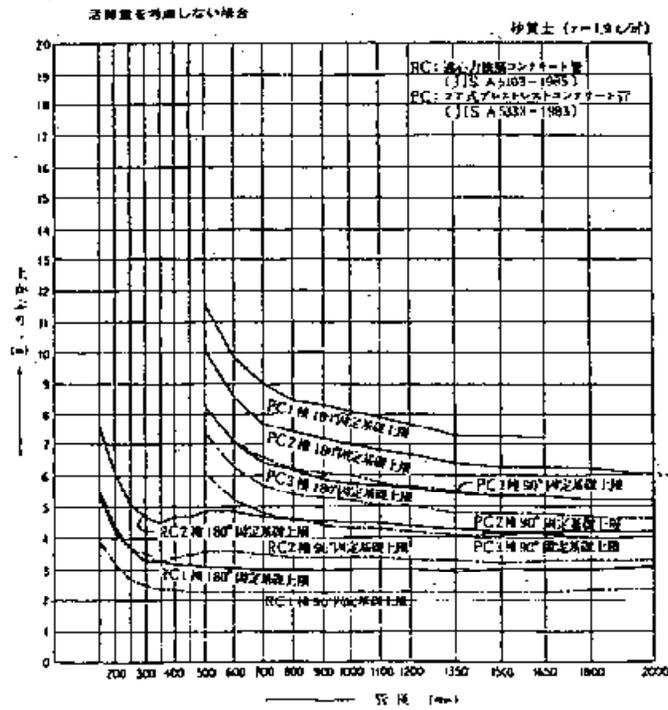


図 - b